

## 美術科

形・色・材料を介して学ぶ喜びや価値を実感する生徒の育成をめざして  
- 題材間の関連性系統性を重視した単元構成の工夫 -

辻 政宏

本研究は、第1学年において「主体的に美術を学ぶことの価値に気付くことのできる生徒の育成」を図るため、題材間の関連性系統性を重視した単元構成のもとでの授業効果を検証した。その結果、生徒の美術の学びに対する意欲や価値意識の高まりを確かめることができた。

美術教育、情操教育、単元構成、思考力、判断力、自己評価、価値意識

### 1 主題の解説

#### (1) 「学びの本質を追究する中学校美術科教育のあり方」とは

中学校美術科の目標は、表現や鑑賞の活動を通して感性を働かせて思考判断し、基礎的能力を身につけながら豊かな情操を養うことである。しかしながら、この教科がめざす「豊かな情操を養うことができたか」について、「美術科でこそその学びの成果」として示すことは困難である。これまで、この「情操」を前面に押し出した主張をしてきたものの、必修教科としての美術科の役割を訴えるには説得力に欠ける感があった。「美術科でこそその学び」とは、あくまで形・色・材料による表現や鑑賞の活動を通して、造形的な感性や思考力・判断力を育成することである。こうした指導が適切に行われることによって、「美術を愛好する心情を育てる」「豊かな情操を養う」などの効果が期待できるものとする。以上のことは、我々美術科担当者の立場からすれば、十分理解できることであるが、今求められていることは、「美術科でこそその学びの目的や成果」を生徒保護者も含め一般の人々にも理解してもらえよう示していくことであると考えた。

そこで、本研究では、全体研究主題である「学びの本質を追究する中学校教科教育のあり方」を受け、「美術科の学びの本質」を以下の観点で追究しながら研究テーマに迫ることとした。

- ア 指導者の立場から「美術を学習させる目的（価値や必要性）」を追究（確認）する。
- イ 少ない時間数の中で効率的且つ効果的な指導を行うための内容を追究（精選，構成）する。
- ウ 生徒に「美術を学習する目的（価値や必要性）」を自覚させるための指導法を追究（改善，開発）する。
- エ ア～ウによる授業の成果について、生徒の「美術を学習する目的（価値や必要性）」を自覚する変容から追究（検証）する。

#### (2) 主題設定の理由

##### 生徒の実態から

本研究を進めるにあたり、これから美術を学ぼうとする生徒たちが小学校図画工作について「どう感じているか」をしっかりと受け止めておく必要があると考え、新入生 200 名（平成 17 年度）を対象に次のようなアンケートを実施した（図 1～3）。

その結果、図 1・2 より、「楽しい」と感じる生徒の割合についてはおおむね予想範囲であったが、「価値がない」とした生徒の割合（約 67%）が、「価値がある」とした生徒の割合（約 33%）を大きく上回った。また、図 3 の生徒の記述からは、美術を学習する目的について感じられていない姿が見えてきた。こうした本校生徒の実態について、一般的な生徒の発達段階から見てどうなのか、これからの美術教育の方向性をも含め、前文部科学省教科調査官の遠藤友麗氏に質問した際の

回答所見を紹介する（一部抜粋）。

「美術は何でやる必要があるのか」このことは多くの生徒が学年にあがるごとに思うことです。幼児や小学校低学年までは「楽しかった」で良いですが、小の高学年からは「何の勉強になるのか、学ぶとどういう事ができるようになるのか、それは将来に使える役立つのか」など、「学びの意味と価値」を考えだします。そのときに「無くても良い教科」という認識を持ちます。「自由に」「創造的に」「想像力を働かせて」「楽しく」・きりがいいほどたくさんの歯の浮くような修飾語を付けて「さも、楽しい活動が大切」かのように言う先生も少なくありません。美術はクラブ活動ではありません。また、選択教科でもありません。れっきとした「高校を含め 10 年必修の教科」です。その 10 年間で一体そのような能力が身に付き、生きることや日々の生活にどのように生きて働く必須のものになるのか、などを一人一人の生徒がきちんと自覚できるような確かな指導が必要です。「楽しい」から「社会で必要な力と経験」になる美術教育になっていかなければいけないと思います。「必要感」を自覚させる「生きて働く力になる美術教育」に改善していかなければならない。「必要で大切な教科」と認識させる授業が大切です。

以上のことから、小学校図画工作から中学校美術へと移行する段階において、取り組まなければならない課題が見えてきた。それは、「すべての生徒にとって、美術科における学びが豊かな生き方を創造する上で不可欠なものとなり得ているのか」、そのための「他教科にはない美術科でこそこの学びとは何か」といった学びの本質を真摯に問い直すことの必要性である。

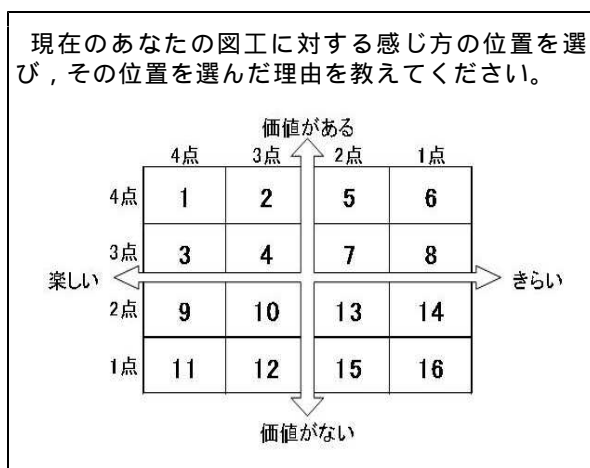


図 1 アンケートの内容

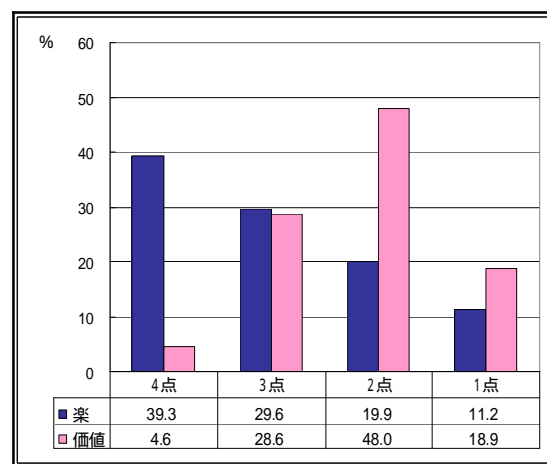


図 2 楽しさ、価値の 4 段階の割合

- ・ 苦手で憂鬱だった。人の作品もうまいか下手だけ見ていた。
- ・ わざわざ作ってそれを評価されても意味がないと思っていた。
- ・ なぜこんなとしなければならぬのか、将来関係ないと思っていた。
- ・ 図工美術は教わっても役に立たない。
- ・ 何も考えずに作っていた。うまい = 良いという考えがあったので楽しくない。

図 3 「価値がない」と答えた生徒の主な理由

「形・色・材料を介して学ぶ喜びや価値を実感する生徒の育成」とは

美術科は、形・色・材料を介して感性を働かせて思考判断しながら学ぶ教科である。先に示したアンケートの中で、生徒たちが、小学校図画工作の中で形や色、材料に慣れ親しんできているものの、それらを表現においてどう扱えばよいか不安に思ったり扱いづらいものと感じていたりしていることが分かった。また、発達段階の特徴として写実表現に嗜好が偏る傾向があり、「写實的に正

確に表現されているか、色塗りが丁寧であるか」によって「上手、下手」という評価をくだしがちであることがあらためて確認できた。こうした生徒の実態を踏まえて、中学校美術科では、生徒たちに「上手な絵が描けるけることよりも、形・色・材料を工夫して独創的な表現ができるようになること」「作品に込められた作者の意図や思いを深く味わう鑑賞ができるようになること」を実感させていく必要があると感じた。更に、これら造形的な学びを、単に美術の学習においてのみ生かされる力ではなく、形・色・材料を介して日常の様々な視覚情報を理解する力、より深い自己理解や他者理解につながる力になることを生徒自身に気づかせることによって、この教科を学ぶ喜びや価値を感じさせていくことが重要であると捉え、本研究主題を設定した。

「題材間の関連性系統性を重視した単元構成の工夫」とは

少ない時間数の中で、これまで扱ってきた題材の時間数の短縮ではなく、「何を美術の学習として位置づけるか」を問い直し、指導内容を精選した単元構成の工夫による効果を検証していく。

『中学校学習指導要領 解説 - 美術 - (1999年版)』において、「第1学年の表現においては、美術の表現の基礎的能力が総合的に身に付くようにするために、特定の表現分野の活動に偏ることなく、絵、彫刻、デザイン、工芸いずれも扱う必要がある」と明記されている。それは、「思うように形が表せる」「思うような色が作れる」「遠近の感じや立体表現ができる」「必要な用具が適切に使える」よう生徒の基礎的な能力を高めることであり、そのためには、「デザインや工芸」の目標にある「造形要素を学び生かす」ことを最優先して指導にあたるべき内容であると捉えた。更に、各領域分野の関連性系統性に着目し精選する中で、美術科でこそ育成すべき学力として、「造形要素を介して思考判断し表現したり鑑賞したりする能力」を確実に定着させていくことを指導目標の柱に据えた。そして、第1学年の基礎基本の定着を図る段階において、各題材の学びが後続の学習に生かされるよう関連づけた単元構成を行い、この単元構成のもとでの実践の効果について生徒の学習前後の意識変化を検証していく。

## 2 仮説と計画

### (1) 仮説

第1学年の段階において、各題材を関連づけた単元構成のもとで、以下に示すように「知る」「試す」「確かめる」段階を踏む授業を展開することは、形・色・材料を介して表現したり鑑賞したりする喜びや価値を実感する生徒の育成に有効である。(図5は、仮説に基づく単元構成の様子を示したものである。)

#### 「知る」段階

用具や描画材料の特徴、形・色・材料のもつはたらきや仕組み、スケッチのコツなどについて自覚させることにより、美術の学びに対する興味関心を高める。

#### 「試す」段階

の状態、刺激や感情など非視覚的なものをテーマに抽象表現を、試験的な感覚で表現させることにより、造形要素に対する価値意識を高める。

#### 「確かめる」段階

の表現に使用されている形・色・材料を分析的に読み取る鑑賞活動を通して、互いの感じとったことを共有し、相違に気づかせ、形・色・材料の効果を確認させることにより、造形要素の働きを意識して活用しようとする意欲や態度を高める。

### (2) 計画

研究対象 本校生徒 (平成18年度第1学年199名)

研究方法 先行調査 仮説に基づく授業の実践 仮説の検証 まとめ

検証方法 アンケートの事前事後調査による数量分析 生徒の自己評価記述による質的分析

### 3 実践例

第1学年においては、基礎的能力を身につけ、美術を学ぶ喜びや価値について自覚していく段階として捉え、各題材の指導内容を関連づけた単元構成を行う(図5,表1)。なお、本校では前後期制による教育課程を組んでおり、前期に「知る」段階を、後期に「試す」段階と「確かめる」段階を位置づけた単元構成を行った。以下、各題材の実践例について解説する。

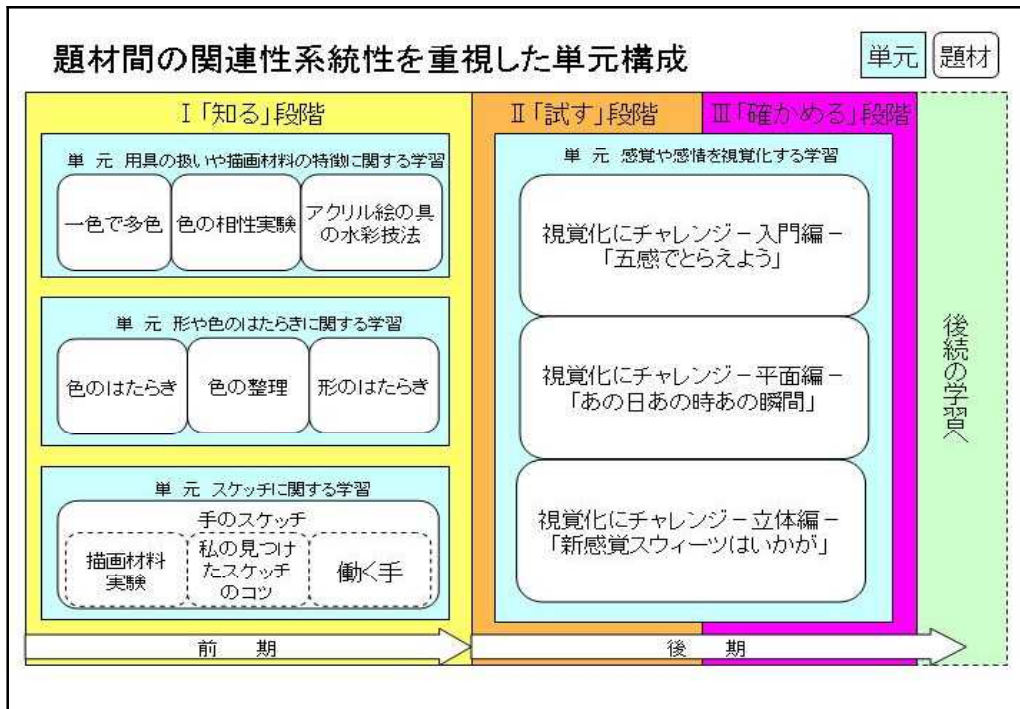


図5 本研究で行う題材間の関連性系統性を重視した単元構成

表1 仮説に関わる第1学年の単元構成と題材配列

期時	単元題材名・指導内容	主な評価の規準
前期	2 <b>単元 アクリル絵の具の特徴と基礎技法, 用具の扱いの理解</b> ア 題材 一色で多色? ・ 絵の具の基礎知識 ・ パレット筆洗筆の使い方 ・ 水のコントロール	混色や筆使いなどの特色に関心を持つ。 技法の特色を生かした模様などを考える。 描画材料や用具の特徴や扱いなどの基礎的な技法の特徴や方法について、自分なりのコツなどを見つけながら身につける。 さまざまな混色や筆使いの違いなどから、その特色を感じ取る。
	2 イ 題材 色の相性実験 ・ 三原色の混色による色味の違い	
	3 ウ 題材 アクリル絵の具の水彩技法に挑戦 ・ 水彩画の比較鑑賞による彩色の多様性 ・ 重色, にじみ, ドライブラッシュ技法	
後期	2 <b>単元 対象の見方とらえ方と鉛筆の特徴を生かしたスケッチ</b> エ 題材 スケッチの学習 ・ 描画材料の特ちょう調べ ・ スケッチの比較鑑賞 ・ 対象のとらえ方 - 基本形でとらえる ・ 鉛筆の魅力 - 筆圧と筆勢	スケッチへの関心意欲を持つ。 スケッチのテーマを発想し、ポーズのとり方を考える。 対象の見方とらえ方を理解し、描画材料の特徴やよさ生かしてスケッチする。 多様な描画材料の特徴やよさに気づく。

前 期	1	<u>単元 色のはたらきと要素の学習</u> オ 題材 色のはたらき ・色の三要素と感情効果	色の属性やはたらきを理解し、色に対する興味関心をもつ。 色のはたらきを利用したテーマを創出する。
	1	カ 題材 色の整理 ・無彩色と有彩色 ・色相環 暖色 寒色 中性色 純色 補色	テーマにそって配色を工夫する。 色を比較鑑賞し、色のもつはたらきを感じ取る。
後 期	2	<u>単元 形のはたらきと要素の学習</u> キ 題材 形の要素とはたらき ・点・線・面の種類と感情効果	形の属性やはたらきに対して興味関心をもつ。 形を比較鑑賞し、形のはたらきを感じ取る。
	4	<u>単元 形・色・材料による感情表現</u> ク 題材 感覚の視覚化にチャレンジ 入門編 ・視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚で分かることの整理	形・色・材料に対する価値意識を高める。 テーマに沿って豊かに発想し構想する。 テーマに沿って形や色表現方法などを選び、創意工夫して表現する。 形・色・材料から、テーマを読み取る。
	6	ケ 題材 感覚の視覚化にチャレンジ 平面編 ・アイデアスケッチのコツ - 発想と構想の方法 ・構成要素 - 数 大きさ 方向 位置 ・相互鑑賞	
6	コ 題材 感覚の視覚化にチャレンジ 立体編 ・平面と立体の違い - 量感と空間の有無 ・立体の要素とはたらき - 線・面・塊・テクスチャ ・材料の特徴の理解 - 粘土の加工方法 ・相互鑑賞		

### (1) 前期実践例

前期（週1時間）は、小学校まで無自覚に扱ってきた造形要素の働きや仕組み、スケッチのコツを自覚することにより美術を学ぶことへの興味関心を高める段階とする。小学校図画工作で、生徒たちは形・色・材料に親しみながら創造することの楽しさを体験してきた。しかし、生徒たちは「楽しさ」だけではなく「学びの成果や必要感」を求めるようになってきている。これまでの美術科ではこうした小学校図画工作の特性や生徒の発達段階への理解が不十分なまま、指導が行われてきたように思われる。そこで、本研究では、第1学年前半を「知る」段階とし、それまでの図画工作で無自覚に扱ってきた造形要素に関する学びを自覚させる段階と捉え、絵の具をはじめとする描画材料の特質や造形要素のもつ感情効果や仕組み（属性）、また、基本的なスケッチのコツ（描画材料の扱い方や対象の捉え方など）を、生徒自身が気づき発見することによって実感し習得できるようにする。更にここでの学びを、次の「試す」「確かめる」段階の学習において生徒が主体的に活用できるよう題材間の内容に関連性系統性を持たせた。

#### 単元 用具の扱いや描画材料の特徴に関する学習

##### ア 題材 「一色で多色」 - 2単位時間 -

##### ・ 主な指導内容と留意点

小学校まで使用していた水彩絵の具や生徒たちが知っている油絵の具とこれからの学習で扱っていくアクリル絵の具の違いを理解させた上で、パレットや筆洗、筆の扱い方と併せて、水分をコントロールするためのコツを習得させていく。まず、絵の具セットから1色（ただし黄系、白

以外)を選ばせ, 1色からたくさんの色をつくるためには, 水のコントロールが大切であることに気づかせる。その上で, 「何色の色をつくり出すことができるか」意欲をかき立てながら取り組ませる(図6)。

イ 題材 「色の相性実験」 - 2単位時間 -

- ・ 主な指導内容と留意点

絵の具セットに入っている色の混色の違いについて確かめる。生徒たちは, 三原色による混色についての知識はあるが, 実際に絵の具セットにある色名は「赤」「黄」「青」ではなく「レモンイエローとイエローディープ」「バーミリオンとカーマイン」「セルリアンブルーとコバルトブルー」である。これらをそれぞれ2色ずつ混色するとどのような色ができるか予想を立てさせ, 混色実験を行わせる。その後, 混色結果を比較分析し色みや鮮やかさの違いに気づかせていく。更に, 「例えば, なぜ, 黄系と青系で違う色ができるのか」について考えさせた後, それぞれの色に含まれる色みの成分について触れておく(図7)。

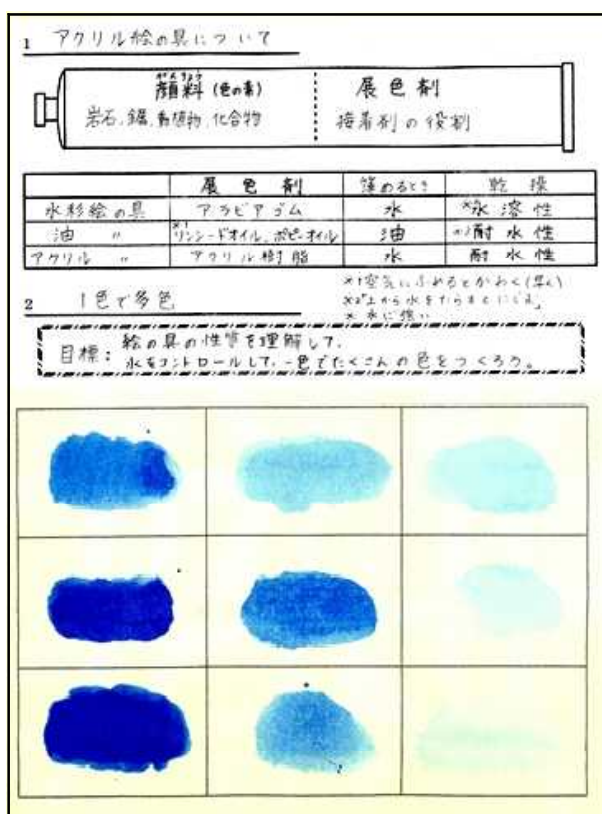


図6 生徒ノートの記録(「一色で多色」の例)

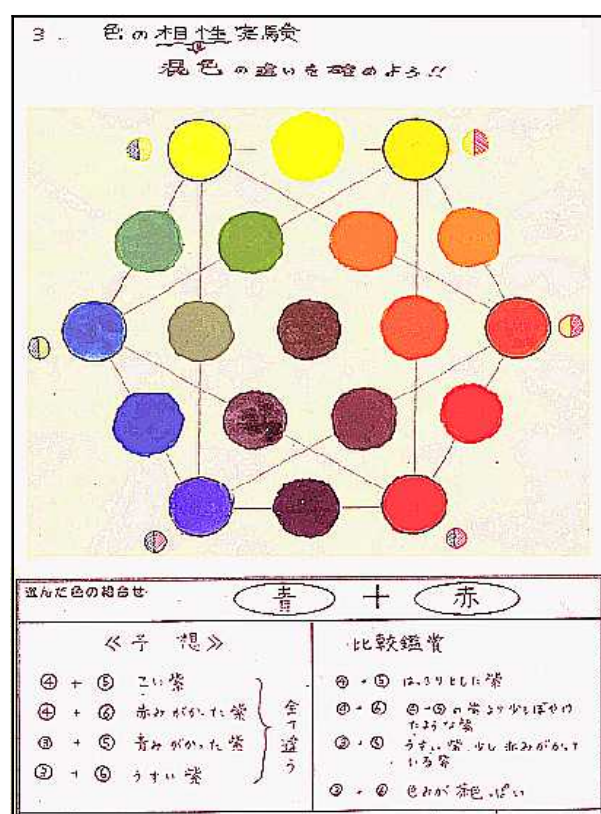


図7 生徒ノート記録(「色の相性実験」の例)

ウ 題材 「アクリル絵の具の水彩技法」 - 2単位時間 -

- ・ 主な指導内容と留意点

着彩の基本技法として「重色」「にじみ」「ドライブラッシュ」を取り上げ, 筆の扱いや水分量の調節などを習得させる。まず, 上記の技法が使われている絵画作品を鑑賞させ, 各技法の特徴やコツ(水分調節や筆の使い方, 筆触)などに気づかせた後, それぞれの作品の印象について, 気づいたことを発表させながら, それぞれの表現の特徴についてまとめていく。次に, 各技法のポイント(水分のコントロールや筆の使い方)を押さえ, それぞれの表現効果を確認しながら練習させていく(図8)。

単元 形や色の働きに関する学習

ア 題材 「色のはたらき」 - 1 単位時間 -

・ 主な指導内容と留意点

色のもつ働きや属性に関する知的理解を図る。この学習ではまず、一組だけ同じ色を含ませた 20 数枚のカラーカードの中から、「同じ色は何組あるか」を予想させることから始め、「何が違うから色の違いが分かるのか」を考えさせていく。そのとき 類似色のカードを比較鑑賞させることにより、「明るさの違い」「色みの違い」「鮮やかさの違い」によって色を見分けていることに気づかせる。更に、各属性のもつ感情効果、例えば明度なら軽重、色相なら寒暖、彩度なら新古といったことを、各々の配色効果を示す参考作品の比較鑑賞から気づかせていく（図 9）。

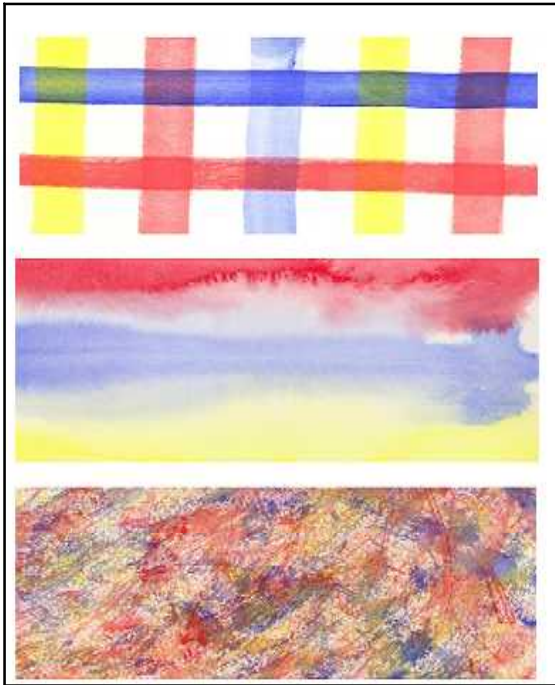


図 8 生徒ノートの記録（「水彩技法」の例）

色の三要素（属性）								
1	明るさ	明度	2	色み	色相	3	あざやかさ	彩度
	・ 軽重 ・ 若老			・ 温冷 ・ 暖寒			・ 新鮮さ	
A			C			E		
	【 軽い、若い 】			【 温かい 】			【 新鮮 】	
B			D			F		
	【 重い、古い 】			【 冷たい 】			【 古い 】	
<p>色から受ける印象、不思議などと思ったり、想像力は、色から受ける印象を口で感じているのびんを表現した。だから、ここからは、色印を理解して、生活にいかしていかさないとと思う。</p>								

図 9 生徒ノートの記録  
（「色のはたらき」の例）

イ 題材 「色の整理」 - 1 単位時間 -

・ 主な指導内容と留意点

色彩の世界を整理し、色の体系について理解させる。まず有彩色（純色）12 色相と無彩色 9 段階のカラーカードをアトランダムに提示し、それらを理由付けさせて 2 つのグループ（有彩色と無彩色）に大別させる。更に、各グループを整列させることを指示し、無彩色は白から黒までのグラデーションに、有彩色 12 色は環状になることを互いの意見を参考しながら気づかせていく。最後に、指導者側から有彩色・無彩色・明度・色相（色相環）・彩度などのキーワードを押さえ、色彩の基本的な体系を理解させていく（図 10）。

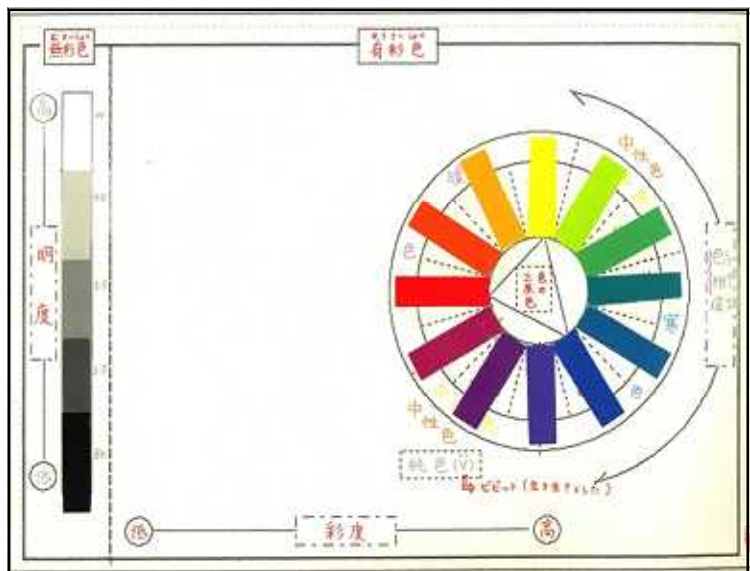


図 10 生徒ノートの記録（「色の整理」の例）

ウ 題材 「形のはたらき」 - 2 単位時間 -

- ・ 主な指導内容と留意点

同種類の商品 2 つについて ( 図 11 ) , どちらの商品をなぜ選んだかを考えさせ発表させる。更に、左右縦のグループで比較鑑賞させることにより、形 ( 丸みを帯びたもの、角張ったもの ) から、「軟い・硬い」、「鋭い・鈍い」、「かっこよい・かわいい」などといった情報を得ていることに気づかせていく。その後、形の属性 ( 点線面の種類とはたらき ) について整理する ( 図 12 )。

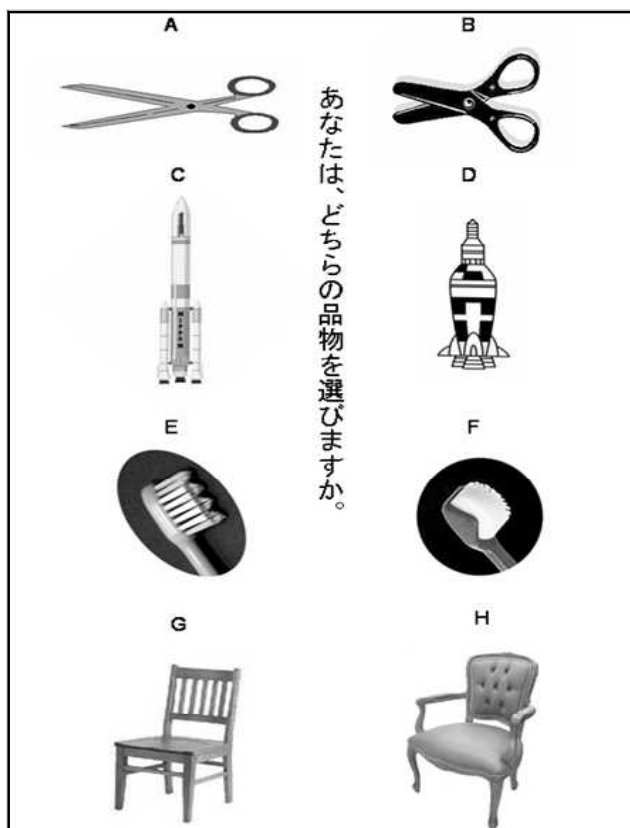


図 11 「形のはたらき」配付資料

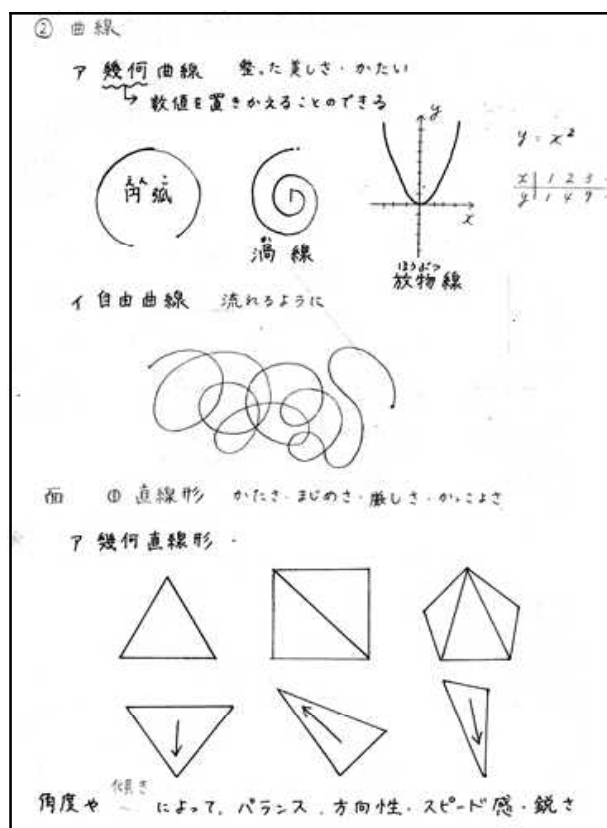


図 12 生徒ノートの記録 ( 「形のはたらき」 の例 )

単元 スケッチに関する学習

ア 題材 「スケッチの学習」 - 3 単位時間 -

- ・ 主な指導内容と留意点

スケッチにおける描画材料の特徴の理解と対象のとらえ方の習得をめざし、「手」をモチーフにスケッチの指導を行う。「手」をモチーフとするのは、紙と鉛筆さえあればいつでもどこでも練習でき、多様なポーズが可能であること、一貫して同じモチーフをスケッチすることにより自己の変化を確認できるからである。更に、本校では、3 年終了時に「15 歳の手」と題した卒業記念画集を作成しており、それに向けて3 年間を通してスケッチ指導を系統的に行っていく。

第 1 学年では、「描画材料の特徴調べ」において日頃使っている筆記用具の特徴を筆圧や筆勢などの違いに気づかせながら、スケッチに適した描画材料が鉛筆 ( 特にやわらかいもの ) であることに気づかせた後 ( 図 13 ) , 一枚目のスケッチに取り組みさせる ( 図 14 )。

次に、自分のスケッチの問題点を発表させ、教師のスケッチの様子を自分のスケッチとの違い ( 対象のとらえ方、鉛筆の扱い方 ) に着目して観察させることにより、その解決方法に気づかせていく ( 図 15 )。その後、「働く手」をテーマにこれまで気づいたことを意識しながらスケッチさせ自己の変化を評価させる ( 図 16 )。



6/19 描画材料の特ちょうを調べよう!!

	えんぴつ 4B以上	えんぴつ 2B, HB	シャープペン	ネームペン
線	・じじりに太く ・濃い ・あたたかみがある	・じじりに太く ・わり少し濃い	・常に同じ太さ ・かちかちした感じ	・少しにじんでいるが、非常に濃く見やすい
構造	・しんを木が大柄の 物に囲んでいる ・ねみを帯びている	・しんを木が大柄の 物に囲んでいる ・角がある	・線が重たい ・持ち手が丈夫	・チップがついてる ・プラスチックに 囲まれている
消した時の様子				
	用りが異なり なかなか消えない	だいたい消えるが 少し残る	ほとんど きえる	全く 消えない。

スケッチに向いているのは? ... えんぴつ 4B (線の太さが多様なため、様々な表現ができる。また、あたたかみがある。)

図13 生徒ノートの記録  
 (「スケッチの学習 - 描画材料調べ」の例)

6/19 えんぴつの特ちょうを生かしてスケッチしよう!!

2分間  
えんぴつ の濃さ → 6B

手のしわなどは、6Bのえんぴつの特ちょうを生かして、線の太さを微細に調整し変えたつもりです。けいこ難しかったけれど、えんぴつの特ちょうを知ることでできておもしろかったです。

図14 生徒ノートの記録  
 (「スケッチの学習 - 1枚目のスケッチ」の例)

7/10 私が見つけたスケッチのコツ

- ・太まめに書いてから細かく描く。
- ・何度も強い線と弱い線で描く。
- ・基準をつくる。
- ・弱い線は、えんぴつか鉛筆をわかせ描く。
- ・よく観て描く。
- ・描画材料の使い方を工夫する。
- ・えんぴつの特ちょうを考え描く。
- ・筆圧・筆勢を工夫する。
- ・えんぴつを人よからほおぎに書く。
- ・消しゴムを使わない。
- ・後のしんらうにじみず描く。

《消しゴムの使い方》

線を書きすぎた時 } 自分で描く  
 強い線を書いた時 } 当てるように消す 線を弱める

基準位置大きさ

抽象

具象

図15 生徒ノートの記録 (「スケッチの学習 - 私の見つけたスケッチのコツ」の例)

7/10 最初のスケッチよりは、結構コツがつかめたと思う。これからも、いろいろなスケッチにこのコツを利用していきたいと思う。

10分 2B

図16 生徒ノートの記録 (「スケッチの学習 - 働く手」の例)

(2) 後期実践例

後期（週2時間）は の段階を踏まえ、非視覚的な刺激や感覚をテーマとした試験的表現活動と分析的鑑賞活動を通して、美術の学びに対する価値意識を深める段階とする。

先にも述べたが、生徒の多くは、「写実的に正確に表現されているか、色塗りが丁寧であるか」などによって上手か下手かという評価をくだしがちである。こうした生徒に、自分の感じたことを形や色、材料を工夫して表現できるということを意識させていくことは美術科の重要な役割である。鑑賞においても、上手か下手かではなく、形や色、材料がどのように扱われているか、そこからよさや工夫、テーマを感じとろうとする感性や態度を育成していくことが大切であるとする。

今回の題材設定にあたっては、あえて具象的な表現を避け抽象的な表現を取り上げることににより、美術に苦手意識を感じている生徒でも表現することへの抵抗感を和らげ楽しく取り組めるのではないかと考えた。更に、鑑賞においても互いの表現の独創性や工夫に気づきやすくなると思われる。また、発想構想については、動機やきっかけとなる主題の設定についての指導を工夫したい。第1学年では「絵や彫刻など」の目標として「対象を見つめ感じとったよさや美しさ、想像したことなどをもとに主題を発想し」とあげられている。それは経験や体験に基づく感覚や感情がどのようなものであるかを明確にしていくことである。そこで今回の実践事例では、主題の発想のタネとして五感によって認知される刺激や感覚に着目し、そのうち非視覚的なもの（音、臭い、味わい、触感など）を形や色、材料によって視覚化（抽象表現）する活動を通して、これら造形要素のもつ感情効果をより一層意識させることができると考えた。このことにより、学習前の「そんなことができるのだろうか」といった不安や戸惑いが「面白い！、すごい！、使える！」といった確かな手応えへと変容するのではないかと考えた。更に、鑑賞活動において互いの感じ方の相違に気付かせることで、造形的な表現が感情を伝えたり感じ取ったりする手段となり得ることに自ずと気づくようになると思われる。

単元 感覚や感情を視覚化する学習  
 ア 題材 視覚化にチャレンジ - 入門編 -  
 「五感でとらえよう」  
 - 4単位時間 -

・ 主な指導内容と留意点

五感によって感じられる刺激や感覚といったことをテーマに、「形や色を工夫して相手に伝えることができるか」を前期の学習を生かして試みる。まず、クラス全体で五感によって得られる情報は何かを発表させ整理する（図17）。

発想構想の段階では、ぼんやりとしたイメージを具現化していくためのポイントを整理しておく。更に、具象を用いず抽象による表現を促す。アイディアスケッチの中からテーマを一つにしぼり、教師が準備したカードに作品を完成させ、裏面にテーマを記入させておく（図18）。

テーマごとにパネルに展示させ、クイズ形式で相互鑑賞を行い、自分のテーマが伝わったか、相手のテーマを読み取ることができたかを確かめる（図19）。

五感でとらえよう 刺激や感覚を視覚化できるか？

1 視覚	2 聴覚	3 味覚	4 嗅覚	5 触覚
見た感じ ・きれい ・さびしい ・明るい ・きたない ・暗い ・大きい ・小さい ・色 ・遠近感 ・広さ ・高さ ・長さ ・速さ	聞いた感じ ・静か ・うるさい ・高い ・小さい ・リズム ・テンポ ・大きさ ・小ざら	味 ・甘い ・辛い ・苦い ・しょっぱい ・しょっぱい ・まじり ・甘じょっぱい ・うまい ・こい ・クマメ	かいた感じ ・甘い ・きつい ・粘り感 ・めろめろ ・すばい ・動物の ・とくちう ・体臭 ・臭い	さわった感じ ・スベスベ ・ザラザラ ・ツツツ ・サラサラ ・ヤトヤト ・プツプツ ・フワフワ ・形 ・あたたかい ・つめたい ・にゅにゅ ・痛...

○ アイディアスケッチ 発想 広げる  
 構想 練り上げる 省略 強調 単純化 etc

消さな  
残す  
の  
（頭の中で思い浮かんだぼんやりとしたイメージを視覚化（形や色など）することにより確かめる。  
 ・できるだけ数多く、多種類を比較することにより、  
 アイディアを仕ぼっていく。 吟味（質の量の中にある）

図17 生徒ノートの記録  
 （「五感でとらえよう」導入段階の例）

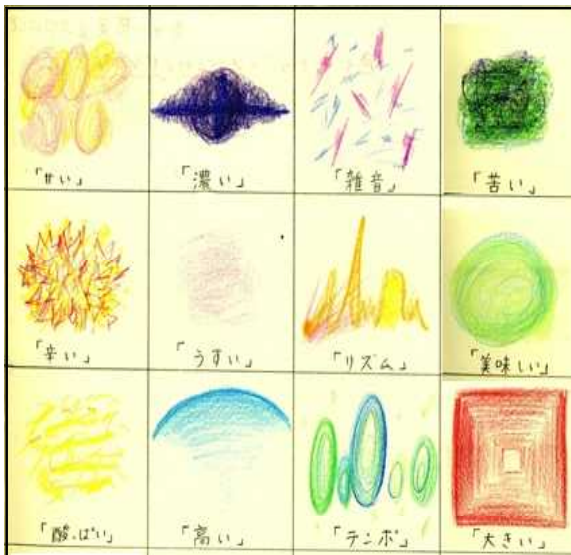


図18 生徒ノートの記録  
 (「五感でとらえよう」発想構想段階の例)

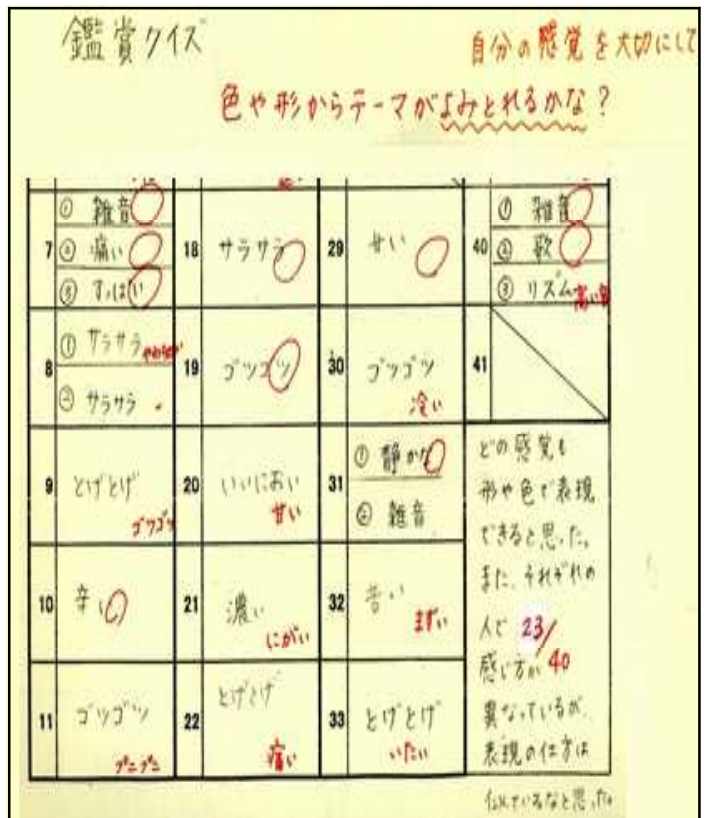


図19 生徒ノートの記録  
 (「五感でとらえよう」鑑賞段階の例)

イ 題材 視覚化にチャレンジ - 平面編 -

「あの日あの時あの瞬間」 - 6 単位時間 -

・ 主な指導内容と留意点

自分の体験の中で最も忘れられない出来事をテーマとし、そのときの感情を形や色、塗り方、画用紙の特性を生かし抽象的に表現させる。まず、作文によってテーマを明確にさせ(図20)、その中に含まれる感情をどのような形や色、塗り方で表現するかアイディアスケッチで確かめながら構想を練らせる(図21)。

制作においてはこれまでの学習の中で身につけてきた知識や技法を活用することを意識させる。また、描くことに加えて、画用紙の特性(折る、破る、切る、貼る、ひっかく、しわを入れるなど)についても工夫できることに気づかせる。できあがった作品の裏面には、作文(図21)を貼らせておき、鑑賞の際、テーマが何であったかを確認されるようにしておく。

鑑賞会では、各班ごとにパネルに作品をレイアウトし、イーゼルに展示させ、時間を区切って全員の作品を巡回しながら鑑賞する。

鑑賞のポイントは、作品に使われている形や色、塗り方からテーマを予想することを伝えワークシートにどのようにテーマを読み取ったか作者へのメッセージを記入させておく。

鑑賞終了後、お互いのコメントを交換、自分のテーマと一致したものしなかったものに分類整理させ(図22)、更に、自分のテーマが「伝わった、伝わらなかった」要因を分析させる(図23)。

あの日 あの時 あの瞬間

印象に残っていることベスト10

- 修学旅行での班別行動
- 奈良の大仏を見たこと
- 金閣寺を見たこと
- 運動会の組体操での3段タワー(小学校)
- 海軍研修の宿でのひととき(海の学校)
- 入学式(中学校)
- 中学受験
- 入試当日

いつ頃	どこで	だれと	なにを
小学6年生の9月頃	学校の校庭で	選抜メンバーと	組体操の3段タワー

「 たった1度のピラミッド 」

私が6年生の時、運動会で組体操をしました。その中で私は3段タワーのメンバーに選ばれました。練習が始まり、メンバー全員が一生懸命頑張りと、当日を迎えました。緊張した空気の中でタワーをつくり始め、一番上の人に乗りました。練習では一回も成功しなかったのに、本番では1発で成功したのです。その日、心の底からうれさがこみ上げてきて、涙が出そうでした。この出来事は今でも鮮明に覚えています。

図20 生徒ノートの記録

発想 色づくり

- 筆触・筆勢・筆
- めり方
  - 水分量
  - 筆の選択

構想 エスキース…作品の完成予想図(設計図)

配色

配置 (形の向き、大きさ、数…)

紙の特性

- 切る
- やぶる
- 貼る
- 折る、しわ



3段タワーが完成したら緊張感

練習時に何年と失敗したあんなにうれし

3段タワーが完成した時のうれし



涙が出さばどうれしめに涙落ち

図21 生徒ノートの記録

(「あの日あの時あの瞬間」発送構想段階の例)

「自分のテーマと一致したもの」

赤い所がほんとうにあるように、感重けた、イ、こちありそう。

これかた様子やかくりした時の事と暗い色と明るい色を混ぜて表現してるのよ

楽しいとかうれし、よさかな気持ちも明るい色から伝わるよ

真ん中の赤い円からうれしさが伝わる。

暗い中がう明るい色でできてるの、練習のせいかな?

よ系の色が感重けた感じがします。

「自分のテーマとは違ったもの」

明い感じがある。でも、暗い感じもあって、途中で落ち込んでいる心。

泳い

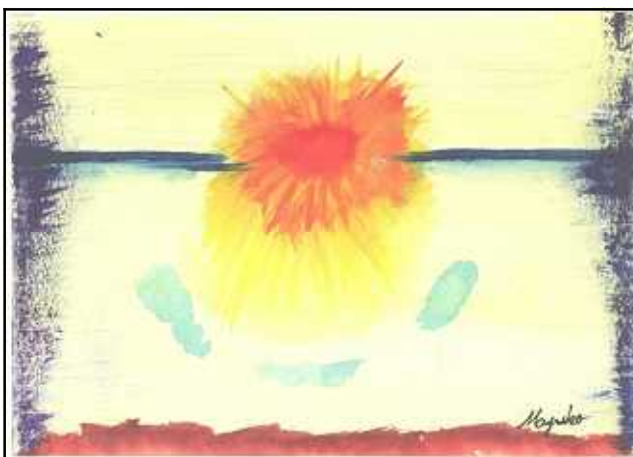
中心が光のように明るくて、目立つ。

夜と月(初)のイメージ、う

うらな感じがいっぱい出てきたよ。

うらな感じの色、はげしい色を使いなしみごとな感じが、かなしさを感じる。

図22 生徒ノート記録(「あの日あの時あの瞬間」鑑賞段階の例)



① どういう工夫が効果を出したか

- 「緊張」を一本の糸で表現したこと
- 「緊張」が解けたことを糸の上に描いたこと
- 「くやしき」と「うれしき」を、暗い色と明るい色で対比させたこと
- 「うれしくはける気持ち」を暖色でドライブラシを使って表したこと

② どんな点が不十分だったか、伝わらなかったのか、どう改善すればいいのか

- 「緊張の糸」が、海と空の境目のように見えただけ
  - 種々の位置がいけない
  - もう少し細く下に描く

図23 生徒ノート記録(「あの日あの時あの瞬間」自己評価段階の例)

ウ 題材 視覚化にチャレンジ - 立体編 -

「新感覚スイーツはいかが」 - 6 単位時間 -

・ 主な指導内容と留意点

刺激・感覚や感情をテーマに，パティシエになりきって新しい形のスイーツを抽象立体として制作する。まず，立体表現の魅力について，素材の違いや具象と抽象の違いのよさなどに着目させた鑑賞を行った後，平面表現と立体表現における造形的な要素の違いに気づかせる。次に，粘土の可塑性を生かすとどのようなことができるかを発表させ整理し（図24），紙粘土の白によってできる凹凸や量感・空間や360°からの眺めを意識しながら制作（図25）。

鑑賞会では，凹凸が美しく見えるように光線のあたり方を意識して作品を展示させ，テーマを読み取りながら相互鑑賞し立体表現によって感情表現ができることに気づかせていく（図26）。

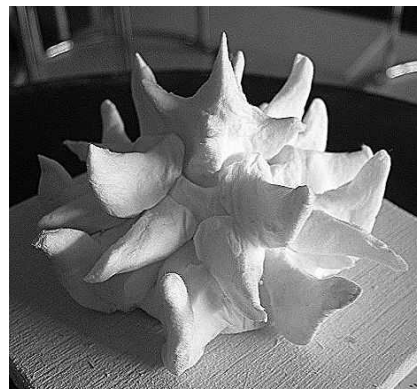


図25 「新感覚スイーツはいかが」生徒作品

五感でとらえよう！  
新感覚スイーツはいかが？

形

①点	量感
②線	量感
③面	量感
④立体	量感

立体 ↔ 平面

量感と空間がある！

①線(材)  
②面(材) 平面・曲面 etc  
③塊(材) 可塑性(塑造)  
彫刻材(彫造)

木材料：紙ねん土

ねん土の加工法

丸める	穴をあける	よる
のばす	くぼませる(型を押す)	ひくく
ちぎる	ねじる	はる
くねる		

図24 生徒ノートの記録（「新感覚スイーツはいかが」発想構想段階の例）

「新感覚スイーツ」鑑賞

12「珍味(怪物花)。 見た目不思議だけど、 とても細かい工夫が されている。	22「ドーナツケーキ」。 おもしろいケーキ！ 見た目何かが不思議な 感じがする。アツアツ!
13「ポーク」 中にはボールが隠れていて、 それが大変そう！量感が 表れている。	23「風が吹く」 とても細かい工夫がされている。 題名からこんな作品だと 思いませんでした。ビックリ!

学習のふり返り

五感(刺激、感覚、感情) ⇒ 全てにまよって表現できるのか？  
光と影(凹・凸)  
量感と空間

自己評価

作る前はねん土だけ、しかも自分で五感を表すのは  
難しい、本当にそんなことができるのだろうか？と半信半疑な  
気持ちで作成しました。思った通りの白いモザイクにも五感を  
表すことができました。自分で作って、友達作品を見たと  
これは二人な気持ちかな？、こんなにいいかな？、etc...  
いろいろ考えが浮かんできました。もし、作る前だったら、  
あまり伝わってこないかなとも思いません。平面だけでなく立体ということも  
良かったんだろうなあと思いました。本当、作ってみて良かったです！

10/10 ノウ

図26 生徒ノートの記録（「新感覚スイーツはいかが」鑑賞段階の例）

#### 4 結果と考察

##### (1) 仮説授業全体の検証

###### アンケートA からの検証

平成18年度第1学年を対象に、仮説授業前後（前…入学時，中…「知る」段階終了時，後…「試す」段階・「確かめる」段階終了時）にアンケートA（図27）を実施。アンケートAの学習前の回答合計点（楽+価値）の平均点により，上位群（平均6点以上…85名），中位群（平均6点…44名），下位群（平均6点以下…53名）にグループ化し，それぞれの群の仮説授業前後の変化を数量（t検定を実施）と生徒の自己評価の内容から検証した。

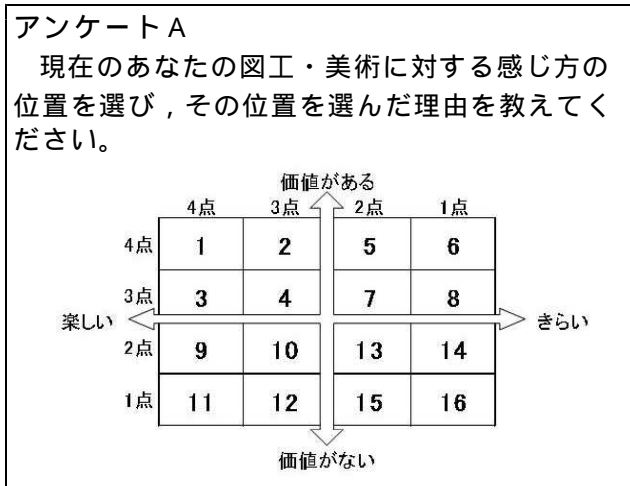


図27 アンケートAの内容

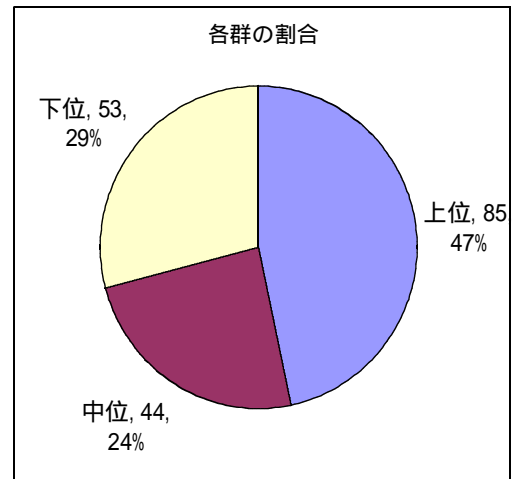


図28 アンケートAによる  
上・中・下位群の人数と割合

##### ア アンケートAの結果

アンケートAの結果，各群における授業前後の平均値の変化は，図29～31のようになった。表2～4は，平均値の変化に差が認められるかどうかをt検定により確かめたものである。

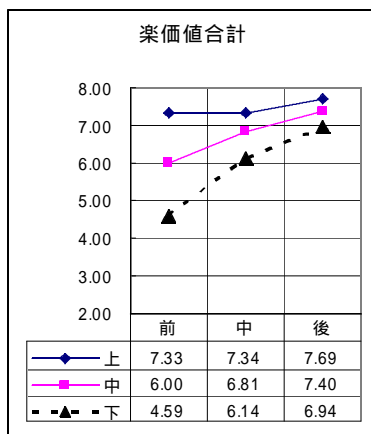


図29 「楽価値」合計の変化

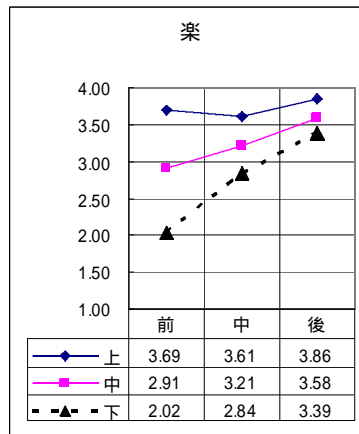


図30 「楽」の変化

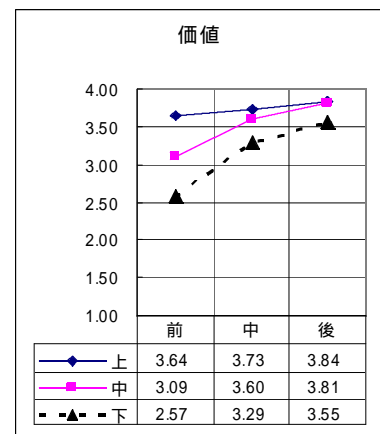


図31 「価値」の変化

表2 図29のt検定結果

	平均点差		有意差(5%)	
	前中	中後	前中	中後
全体				
上	-0.01	-0.35	なし	
中	-0.81	-0.58		
下	-1.55	-0.80		

表3 図30のt検定結果

楽	平均点差		有意差(5%)	
	前中	中後	前中	中後
上	0.08	-0.25	なし	
中	-0.30	-0.37		
下	-0.82	-0.55		

表4 図31のt検定結果

価値	平均点差		有意差(5%)	
	前中	中後	前中	中後
上	-0.09	-0.11	なし	
中	-0.51	-0.21		
下	-0.73	-0.25		

イ 生徒の記述より

ここでは、アンケートAの結果を踏まえ、特に顕著な変化のあった下位群の生徒の意識の変化(表5)に着目して検証を行う。

表5 下位群の生徒の各段階の授業後の記述(一部抜粋)  
表中の数字はアンケートAにおける美術に対する感じ方の位置を示す。

生徒	前 入学時	中 「知る」終了時	後 「試す」「確かめる」終了時
A	6 自由にできることは楽しいが、あまり上手にできない。	2 絵は色や描き方によって見る人を楽しませたり感動させたり元気にしてくれる。それに手をかくのを練習することでどんどん上達するのがうれしい。	1 美術の授業を受けるごとにどんどんできることや考え方が豊かになるので楽しい。
B	8 絵の具を使って描くところは楽しいと思うが将来役に立つかといえばそうではない。画家にならなければ意味がない。	3 色の勉強スケッチをすることで美術の技術の幅が広がった。テストでは点は出せなかったが、楽しかったしきっと価値のあるものだと思う。	1 制作がとても楽しかったし何よりも自分の手でものを作り上げていくことを実感できた。それを実感することに価値があると思った。
C	10 ものをつくるのは好きだけど描いたりするのは特徴がつかめないのいでいやだ。	2 ドライブラッシュとかやっていろいろな色の塗り方があったことがわかった。いろんな塗り方をするとべた塗りしたときと感じが変わった。	1 今まですべての授業がつながっていたことがわかった。これから美術に対する思いが変わった。自分の思ったことを表現できることが最高です。
D	12 どのように自分の思いや考えていること形に表せばよいかわからないし、つい周りの人と比べてしまい恥ずかしく感じてしまう。	3 美術と生活がつながっていることがわかって、美術面からも生活面からも美術を見つけたいようになった。美術館に行くのも好きになった。	1 美術から学んだほとんどのことが身の回りのことに関係していることがわかり、どんどん学びたいと思っているから。
E	13 自分の考えや構想がうまく表現できない。まじめにしたつもりでもほとんど成績が伸びなかった。	3 色や形が人間に及ぼす影響など、理科的な内容を勉強できることやそれを実行に移せることが美術の楽しいところだと思う。	2 平面から立体になってとても内容が濃くなったと思う。
F	13 やるのが面倒で絵なんて必要ないと思う。	4 価値がありそうな気がする。	2 苦手でもそんなに好きでもないけれど美術を勉強して価値があると思った。
G	14 絵がへたくそだし不器用だから。	12 頭の中で将来どのように役に立つのかわからない。	4 ものをいろいろな視点から見るのに美術はとても大切だと思う。

ウ 分析

図29~31及び表2~4より、上位群において前から中での変化は見られなかったが、その他については、+方向への変化が確かめられた。特に下位群においては他の群に比べ+方向への顕著な変化が確かめられた。また、生徒の記述(表5)からは、形・色・材料のもつ働きを知ることで自分

の思いが表せるようになったことや美術を学ぶことによって見方や感じ方が豊かになったことが、楽しさや価値を感じられることにつながっていることが伺えた。

### エ 考察

「知る」段階において、造形要素のはたらきやスケッチのコツなどを身につけたことが美術への興味関心を高め、「試す」「確かめる」段階において、それまでの学びを活用できたことが、美術を学ぶ楽しさや価値意識の高揚につながったものと思われる。このことから、生徒は、「知る」「試す」「確かめる」段階を踏む学習を経験したことにより、美術を学ぶことへの喜びや価値を感じていることが確かめられた。

### (2) 各段階の授業効果の検証1

#### アンケートBからの検証

アンケートAによる上・中・下位群の仮説授業の各段階における効果を、アンケートBの結果(t検定を実施)によって検証した。

#### ア アンケートBの結果

アンケートBの結果は、図32及び図33～35のようになった。

アンケートB 次の質問項目に関して、現時点でのあなたの感じ方について、以下の4段階で回答してください。 1 思わない 2 あまり思わない 3 思う 4 たいへん思う		t検定 有意差 1%		
		上	中	下
知 る 段 階	<b>単元：用具の扱いや描画材料の特徴に関する学習</b>			
	問1 絵の具の混色の方法を知ると表現することが楽しくなると思います。			
	問2 絵の具の特徴や用具の扱いを知ると表現することが楽しくなると思います。			
知 る 段 階	問3 いろいろな色の塗り方を理解すると表現することが楽しくなると思います。			
	<b>単元：スケッチに関する学習</b>			
	問4 スケッチするときの鉛筆の特徴や扱い方を理解するとスケッチが楽しくなると思います。			
知 る 段 階	問5 スケッチするときの対象の見方とらえ方がわかるとスケッチが楽しくなると思います。			
	<b>単元：形や色のはたらきに関する学習</b>			
	問6 形や色に仕組みやはたらきを理解すると自分の発想や構想が豊かになると思います。			
知 る 段 階	問7 形や色のもつはたらきを理解すると、自分の感じたことを表すことができると思います。			
	問8 形や色のもつはたらきを理解すると、自分のものの見方や感じ方が豊かになると思います。			
	<b>単元：感覚や感情を視覚化する学習（表現）</b>			
試 す 段 階	問9 目に見えない感情や感覚は形や色で表すことができると思います。			
	問10 形や色には、ものの姿や色を表す以外に感情を伝えるはたらきがあると思います。			
	問11 目に見えない感覚感情を形や色で表すと、形や色のもつはたらきをより深く理解できると思います。			
試 す 段 階	問12 目に見えない感覚や感情をかたまりで表すと、かたまりのもつはたらきをより深く理解できると思います。			
	問13 目に見えない感情や感覚は、かたまりで表すことができると思います。			
	問14 かたまりには、ものの姿を表す以外に感情を伝えるはたらきがあると思います。			
確 か め る 段 階	<b>単元：感覚や感情を視覚化する学習（鑑賞）</b>			
	問15 友達の作品を鑑賞することで自分の感じ方が豊かになります。			
	問16 友だちの作品を鑑賞することで形色材料のもつはたらきをより深く確認できます。			
確 か め る 段 階	問17 友達の感じたことを知ることで形色材料のもつはたらきをより深く確認できます。			
	問18 友達の感じたことを知ることで自分の見方感じ方が豊かになります。			
	問19 友達の感じたことを知ることで次の表現に生かすことができます。			
確 か め る 段 階	問20 他者の表現のよさや工夫作者などの思いなどを形や色、材料から感じ取ることができます。			

図32 アンケートBの内容とt検定の結果



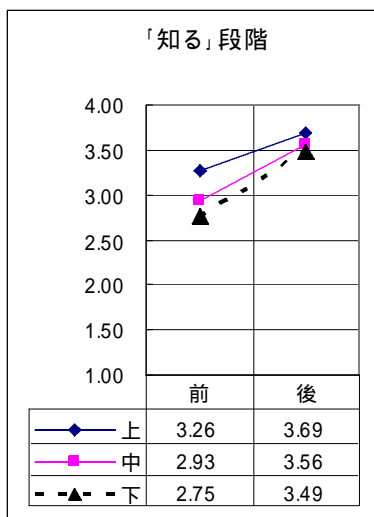


図33 問1～8平均点の変化

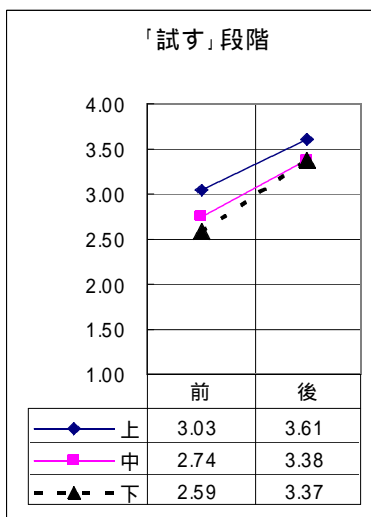


図34 問9～14平均点の変化

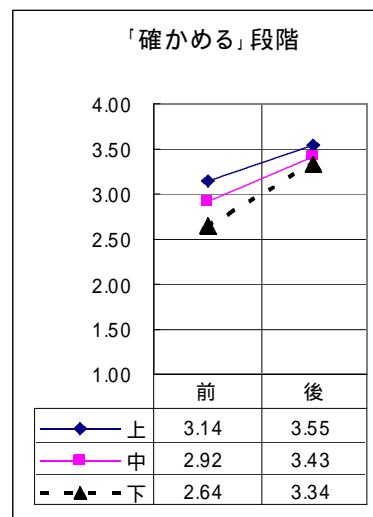


図35 問15～20平均点の変化

## ウ 分析

図32に示したように、すべてのアンケート項目について、各群において各段階の前後平均値の差に+方向への変化が確かめられた。また、図33～35（各段階のアンケートBの回答点数の平均点）より、各段階の平均値の変化について、前より後における上位群・中位群・下位群間の平均値の差が減少していることが確かめられた。

## エ 考察

生徒は、「知る」「試す」「確かめる」段階を踏む学習をしたことにより、形や色などに対する理解の深まりや価値意識の高まりが確かめられた。

### (2) 仮説授業各段階の検証2

各段階の授業効果について、生徒の自己評価の記述による検証を行う。

#### 「知る」段階の検証

##### ア 生徒の自己評価の主な記述より（一部抜粋）

以下、アンケートAによる上・中・下位群の生徒の前期の学習の自己評価記録の一部を紹介する。

上位	美術の授業が始まった時は、楽しいだけで作品に意味を求めていなかった。でもだんだんと色や形の持つ特徴や鉛筆などの描画材料を学んでいくともっと深く学びたくなってきた。またそれが作品への興味につながっていった。いつしか自分もそういう思いを伝えられる作品を作りたい。
上位	中学校に入学する以前は例えば混色なら赤と黄はオレンジ、位にしか感じていなかったが中学で詳しく学びはじめてにゴリの少ない混ぜ方など少し発展した知識を知った。またそれを実際にやってみることで塗り方描き方のコツが見えてきてとてもおもしろかった。簡単そうに見えて結構難しいと思うことが多くてどのようにすればもっとうまくできるかを探っていくのも楽しかったし、まだまだ知らないコツとかもありそうなので後期はそれをたくさん見つけるようにしたい。鑑賞の授業では、友達と意見を交換しあうことで自分になかった意見もたくさんわかっていろいろな見方が学べられたと思う。後期の鑑賞の時間ではいまま

	で習ってきたことを生かして一つの作品をいろんな方向から見られるようにがんばっていき たい。
中 位	前期を振り返ると中学に入ってから学んだものはたくさんあるなと思った。水を使い色 を作ることや手のスケッチや鑑賞などいろいろなことを学んだ。でも僕が一番頭に残っている ことは重色にじみドライブラッシュの学習だ。このことはいつまでも忘れないと思う。 <u>昔は 思っていなかったが美術はぼくの絵に対する価値観を上げた</u> と思う。小学校のころはあまり 楽しくなかったが <u>今は美術は将来に生かせると思っている。</u>
中 位	<u>美術は人間の心を豊かにしてくれる不思議なものだ</u> と感じました。あと、ふだん私たちは <u>形や色によってイメージを作っている</u> こともわかりました。
下 位	最初は絵を上手にかけるようになりたいとしか思っていなかったけれど <u>美術とは絵を描く だけでなく感情を込めたり一つの絵から作者の気持ちを読みとることだ</u> と感じた。色は人に温 かさや冷たさを与える大切なものだということがわかった。後期は、前期で覚えた技法を使 ったりしてもっと美術に対する関心を高めていきたいです。
下 位	授業を受ける前までは何かを作ったり描いたりすることが大嫌いでした。人と自分をを比 べてしまい自信がなくなって進んでしようとは思っていませんでした。しかし、授業を受け てからは、 <u>今まで「上手かどうか」で人や自分の作品を判断していたのが、「どんな思いが この作品に込められているか」で人や自分の作品を見ることができるようになりました。</u> そ こから美術館や展覧会へいくのも好きになりました。また、実際に授業で <u>スケッチするとき も鉛筆の特徴を生かしたりものの構造や仕組みを理解したりしてできるようになりました。</u>

## イ 分 析

上記の自己評価の記述からは、形や色、スケッチなどの基礎基本を学ぶことによって、形や色に働きがあることに気づきながら、美術を学ぶことへの関心意欲を高めていることが伺えた。

## ウ 考 察

前期の学習内容はややもすると知的理解に重心がかかりすぎているように思われるが、形や色の持つ働きを知ったりスケッチのコツなどを身につけたりするなど、これまで無自覚に行っていたことを自覚させたことが、美術の学びに対する関心や意欲を高めることにつながったと考える。その際、生徒が主体的に学習に取り組めるよう予想させたり確かめさせたりするなどの働きかけを工夫したことが、自ら気づき発見することにつながり学習意欲の向上に効果があったものと思われる。

以上のことから、生徒は、形・色・材料の働きや仕組み、スケッチのコツなどを自覚することにより、美術の学びへの関心意欲を高めることが確かめられた。

### 「試す」段階の検証

#### ア 生徒の自己評価（授業前後の変化）の主な記述より（一部抜粋）

以下、アンケートAによる上・中・下位群の生徒の各題材の学習の自己評価記録の一部を紹介する。

#### 「視覚化にチャレンジ - 入門編 - 」

上位	色や線の動きを使って目に見えないものを表した。 <u>色や線をうまく使うと表現が豊かになった。</u>
上位	目に見えないものを形にするのはたいへんだったけど、 <u>描画材料の使い分けや線の性質を考えると目に見えないものの形がでてくる感じがした。</u>
中位	<u>五感で感じたことを色や形に表せられることを知って表現方法が豊かになった</u> と思った。

	また、 <u>同じ感覚を表すのにもいろいろな色や形で表せることを知っておもしろいな</u> と思った。
中位	<u>今まで深く考えずにアイデアスケッチしていたけれど、中学校で学習した色や形を生か</u> <u>せた。</u>
下位	<u>五感とかのアイデアスケッチでは自分で形を作れるので楽しい。</u>
下位	<u>形に表せるはずがないと思っていたものが形に表せるのはおもしろい</u> と思った。

「視覚化にチャレンジ - 平面編 - 」

上位	感情を視覚化するのに、紙の特徴を生かしてくしゃくしゃにしたり破ってみたり工夫した。また <u>今までに習った「ドライブラッシュ」「にじに」</u> などを使うことにより、 <u>表現しようとしたものが表せた。</u>
上位	<u>色のサンプルを作ることで一つの感情をいろいろな色で表せることを知った。今後も生か</u> <u>していきたい。</u>
中位	色のサンプルを作ってどの <u>色がどのような感情を表しているのかわかるようになった。</u>
中位	<u>自分の感情をいろいろな色に置き換えることができた。</u>
下位	<u>自分の心の中を表現することが楽しかった。もっと自分の心を表したい。</u>
下位	<u>気持ちを色や形で表現するのはたいへんだったけど、今まで勉強したことを使ってがんば</u> <u>った。</u> 形、配色、配置を考えた。

「視覚化にチャレンジ - 立体編 - 」

上位	これまでは平面だけに目を向けていたので <u>空間にチャレンジすることでかえってアイデ</u> <u>ィアがたくさん浮かんできた</u> ような感じがした。
上位	動きを豊かに表すことができた。 <u>前よりも発想を豊かに考えられるようになった。</u>
中位	デザートのアィディアを考えた。 <u>立体というのは人間が最も身近に感じる芸術だ</u> と思う。 イメージ通りには作れないけど満足かな。もう一つの作品も作ってみたい。
中位	<u>はじめて立体制作を行って、感情を物体で表現すること、360°から作品を鑑賞する</u> <u>ことのすばらしさを感じた。</u>
下位	<u>立体は質感や動き量感を意識して自分の表したいことを表現することが大切だ</u> と思った。
下位	粘土を使って感情を表現した。 <u>色が使えないので形や触感を利用して制作に取り組めた。</u>

## イ 分 析

上記の自己評価の記述からは、難しさを感じながらも、形・色・材料のはたらきを意識して活用しようとしている姿、平面表現や立体表現によって感情を伝えられることの楽しさや可能性を感じている姿が伺えた。

## ウ 考 察

この段階では、「知る」段階での学習の成果を試すことになる。指導においては、刺激や感覚、感情をテーマとして、非視覚的な世界を造形的に表現できるかどうかを生徒自身に確かめさせることを留意した。やや高いハードルを設定したことが、生徒たちの不可能困難と思われることへチャレンジしようとする意欲をかき立て、造形要素の効果を確認め工夫しながら、これまでの学習を生かして形や色、材料を扱おうとする意識や態度の高まりにつながったものと思われる。

以上のことから、生徒は「知る」段階を踏んだ状態で、刺激や感情など非視覚的なものをテーマとした抽象的表現を、試験的な感覚で表現したことにより、造形要素に対する価値意識を高めることが確かめられた。

「確かめる」段階の検証

ア 生徒の自己評価の主な記述より（一部抜粋）

以下，アンケート A による 上・中・下位群それぞれのグループの生徒の各題材の学習の自己評価記録の一部を紹介する。

「相互鑑賞」

上位	ただ作品を見るだけではなく， <u>他の人の作品のよいところを取り入れるというのが鑑賞の醍醐味だ</u> と思った。
上位	みんなの作品を見ていると <u>さまざまな工夫（色形）からいろんな気持ちが伝わってきてスゴクおもしろかった。</u>
中位	自分だけでなく <u>他の人の作品を見ることすべてが勉強になった。</u>
中位	<u>自分以外の人</u> がどのように感情を視覚化しているかを知ることにより表現鑑賞の仕方が豊かになった。
下位	<u>人によって考え方感じ方が違うことを実感した。</u>
下位	<u>色や形，紙の使い方から結構読みとれるものだな</u> と思った。

「自己作品分析」

上位	自分の作品から伝えたいことが伝わりにくいみたいだったが， <u>自分の作品のことを客観的に見ることができてよかった。</u>
上位	<u>自分のイメージと同じ意見ではなく違う意見にこそ学ぶものが多い</u> ことに気づいた。
中位	テーマと同じか否かよりも「 <u>どうしてそういう風に考えたか</u> 」というところを参考に次に生かそうと思いました。
中位	自分の感じ方と同じだった人，違っていた人， <u>同じものからいろんな気持ちがわかるんだな</u> と思った。
下位	自分が思った気持ちを描いたが， <u>違うふうに取り取った人もいたので反省点が出てきた。</u>
下位	自分のところにも <u>参考になるいい意見を探り入れることができ自分の作品がよりよくなっていた。</u>

イ 分析

自己評価の記述から，作品に使われている形・色・材料から分析的に鑑賞しようとする態度や鑑賞のポイントに気づく様子が伺える。さらに友達の自分の作品に対する評価を知ることにより，新たな課題を見出している姿が伺える。

ウ 考察

この段階では，お互いの作品を形や色などに着目した鑑賞を行い，読み取ったテーマとその理由を記述したコメントを伝え合っている。そのコメントを自分のテーマが伝わったものとそうでないものとに分類し，何が効果的だったのか，何が不十分だったのかを客観的に自己分析させたことによって，形や色のはたらきを一層理解し意識して扱おうとする態度の育成に効果があったものと思われる。また，「知る」「試す」段階での学びを生かすことで，作品に扱われている造形要素から作者の思いが読み取れることを実感しながら，鑑賞することへの興味関心を高めることができたと考える。

「知る」「試す」「確かめる」段階を通しての検証

以上のことから，生徒は，表現に使用されている形・色・材料を分析的に読み取る鑑賞活動を通して，互いの感じとったことを共有し相違に気づき形・色・材料の効果を確かめることにより，こ

れら造形要素のはたらきを一層理解して扱おうとする意欲や態度を高めることが確かめられた。

(3) まとめ

(1)(2)の検証より、生徒は「知る」「試す」「確かめる」段階を踏む学習を通して、形や色、材料のもつ働きを実感しながら、表現したり鑑賞したりすることへの意欲や価値意識を深めることが確かめられた。

更に、今回の実践の成果を示すものとして、次のような生徒の記述（1年修了時『私と美術』と題した生徒作文より）を紹介する。

上位	<p>美術の授業では、自分の伝えたいことをどのように表現すればよいかの方法を知り、その方法を使って実際に表現してみたりしてきました。美術は、ものをそのまま描くだけではなく、そこに<u>思いを込めたり目には見えない感情を視覚化して見る人達に伝えていく役割をもっているのだと授業を受けて感じました。でも、その伝えたいことをどうすれば伝えられるのかを知らなくてはなりません。そこで、技法を学び深く表現できるようにするのです。また、美術の学習では学んだことが次から次へと生きてくるところも楽しいです。中学の美術の授業を受けて変化したことが二つあります。1つ目は「美術は何かを伝えられる」ということ。2つ目は「その作品を観たり使ったりすることで生活に生きてくる」ということです。これからもたくさんの方のことを学び表現していきたいです。</u></p>
上位	<p>小学校の時に学習した「図工」と今学習している「美術」は理解度（「なるほど！」と思ったこと）が全然違った。「図工」よりも<u>更に視野を広げ、いろんな面から見たり、他のものと関連づけたりもっと奥深いことが学べる</u>と思う。ただものを作ったり書いたりするだけで楽しいと思っていたのが、<u>「美術」でいろんなことを学んでから、いつも「なるほど」と思って、「だから～」と関連づけていくと更に詳しいことがたくさんでくる。私にとって「美術」の楽しさの中の一つはこのことだ</u>と思う。また、自分らしさ個性がでてくるし、自由な発想ができるから頭の中でたくさんのアイデアが浮かんでくる。そしてその中で一番よいものを作り上げたときは（納得のいかない時もあるが）自分のがんばった成果だといえる。</p>
中位	<p>中学校に入学したばかりのころは、美術は図工の延長線上にあると思っていた。でも実際には制作中心だった図工とは違って、<u>色や形、文字などのデザインの性質を数多く学ぶことができた。それによって表現の幅が広がり、より多くのものを自分の思い描いているように制作できるようになった</u>と思う。一番変化したことはものを<u>作るだけが美術ではない</u>ということだ。<u>外観だけを観るのではなく、それを深く知ることの中で何か変化が起きたのであったら、それが美術の本質である</u>と思う。そうできるために、<u>この美術の時間で「感じて創造する能力」を養っていきたい。</u></p>
中位	<p>私は初め「美術は教養であって生きていく上ではあまり必要ない」と考えていました。でも最初の「色」の勉強をしたときに、<u>私たちは色から、イメージや雰囲気を受け取っていることを知りました。</u>今から考えると当たり前のことかもしれないけれど、私はそのときもの<u>すごく驚き納得したのを覚えています。色や形などといった自分のすぐ身の回りから私たちは情報を受け取ったり、気持ちを考えたりしているんだ</u>なと思いました。だから、今はそういう<u>色や形で感情を表したり理解したりする美術が生きる中で大切なものなんだ</u>と思います。これからいろいろなことを学んで<u>自分の気持ちをうまく表現できるようになりたい</u>です。</p>
下位	<p>この美術の授業を受ける前までの私は、何か作品を作ったりすることが大嫌いでした。頭の中にはたくさんのアイデアがあるのに恥ずかしくてそれを形にすることができませんでした。（中略）でも<u>この授業を受けて何かが変わりました。ものを作ることが楽しいことを知りました。また身近にあるいろいろなものが「美術」とつながっていることを知り、「美術」に</u></p>

	<p><u>興味を持つようになりました。今では、美術の時間に習った色の工夫や技法が本当に「作品」に使われているかを知りたくて美術館に行くこともあります。そして「すごい!!」と思った作品の前に30分間以上いて色づかいや技法などを研究することもあります。この1年間で私は「美術」の魅力に心からひかれていったと思います。</u></p>
下位	<p>最初の頃よりは美術を楽しみと思えるようになったけれど、やっぱり美術の時間が長く問いじられてしまう。<u>美術が嫌いな私でも、よいことはたくさんあった。絵の具の技法や五感でどう感じているかを学んだから自分の力になったと思う。そのおかげで前よりも私の作品はよりよりのへと変わっていった気がする。</u></p> <p>これから、<u>なるべく美術が好きになるようにして自分の中の気持ちを変えていこうと思う。</u>そして私が<u>まだまだ知らない美術の世界を少しでも多く学習して作品に反映させていきたい。</u></p>

以上のような生徒の記述をみると、美術科における学びが何をもちたらし、また美術科の学びに対する価値意識の深まりを読み取ることができることから、今回の仮説に基づく実践によって研究主題に迫ることができたのではないかと考える。また、今回の結果が、この教科の目的や成果について保護者も含め一般の人々にも理解してもらえらる根拠の一つになるのではないかと感じている。

## 5 今後の課題

今後の課題として、次の点を上げる。

- ・各題材における評価の観点に照らした検証を行っていくこと。
- ・2, 3 学年での追跡調査検証を行っていくこと。そのための、2, 3 学年への関連性系統性を明確にした題材配列を示すこと。
- ・他年度第1 学年での授業成果と比較検証すること。
- ・小学校図画工作と中学校美術の系統的な教科課程について研究、構築していくこと。

以上の課題については、附属小学校及び大学との連携を深めながら、今後研究を進めていく予定である。

## 参考文献

- 1) 遠藤友麗 『改訂 中学校学習指導要領の展開 美術編』 明治図書 2000
- 2) 宮脇 理 『美術教育の基礎知識』 建帛社 2000
- 3) 国立教育政策研究所  
「図画工作・美術のカリキュラムの改善に関する研究 - 諸外国の動向 - 」 2003
- 4) 武本賢治 森 弥生  
「鑑賞を手がかりに探る小中の系統性を生かした中学校美術科の教科課程の在り方」  
岡山大学教育学部附属中学校研究紀要第28号 2000
- 5) 武本賢治 森 弥生  
「日々のさまざまな学びを視野に入れた中学校美術科のあり方」  
岡山大学教育学部附属中学校研究紀要第35号 2002
- 6) 辻 政宏 森 弥生  
「表現と鑑賞を一体として扱う中学校美術科教科課程の提案」  
岡山大学教育学部附属中学校研究紀要第39号 2004

